

木 醉 馬

1 月

大正十二年一月二十七日第三種郵便物認可
今期二年一月一日發行（一月一週二日發行）
昭和二十四年二月七日因改訂運水費增額原稿六等
第九十九卷 第一号



冬薔薇や燈台守はものを読む

秋櫻子

『新樹』

西洋式燈台の最初は観音崎で明治二年（一八六九）。同じ三浦半島の城ヶ崎燈台は翌年五番目に点燈した。季語からは自身の仕事に誇りを持って励んでいる若い職員の姿が浮ぶ。季語を冬の草花に限っても水仙なら経験豊富な穏やかな中年か。冬菊は少々厳しい人を想像させる。退職間近なら室咲だろうか。無駄なもののない室内。素朴な机でどんな書物に向かっているのだろうか。

小野恵美子

流 転

徳田千鶴子



蠟石の固き手触り冬に入る

手焙や寄木細工の鉋屑

弧を描き土器冬の谷に消ゆ

神の留守妻の本音は秘めしまま

狸汁嘘も誠となりぬべし

竜の玉こぼるるを手に父のこと

冬空の深さに溺れたき一日

一月集



耕す 中村風信子

冬耕の坪の菜園豊かなり
首塚の前の畑を冬耕す
冬耕の暮色曳きつつ帰りけり
大根を引きたる穴の匂ひけり
反芻の牛の牧空赤とんぼ

魯田 福永みち子

読み書きの手元明るし菊咲きて
山影のかぶさつて来る晩稲刈
背山より風の下り来る牡丹鍋
魯田にひねもす湖の風通ふ
昨夜の雨残りて匂ふ落葉かな

通せん坊 長谷川翠

暗算ですむ家計簿や文化の日
起き抜けの白湯一碗や今朝の冬
室咲きの溢れ病院内の花舗
池普請一縷の水に日を流し
茶の花や三途の川の通せん坊

今朝の冬 石本秋翠

一山の柞もみづる鳶の笛
里山を木霊駆けゆく威し銃
山津波鎮め暮秋の月円か
行く秋や伊予の霊峰泰然と
石鎚山の空鴉色に今朝の冬

行く秋 山本雅子

風と駆く子供の声と赤とんぼ
初鳴や夕日搔きよせ陣をなす
河童棲む沼のしづけさ稲掛くる
鮭遡上淋しきまでに傷を負ひ
飛鳥仏まとふ天衣や後の月

蚯蚓鳴く 近藤暁代

秋麗の波ほどきつつ水馴棹
大灘の藍深々と神の旅
濁世に覚めて独りや蚯蚓鳴く
惜別の顔を曝せり雪螢
冬蜂の石ともならず黙しをり

羽前便り(子子)

沼澤石次

逆縁

富永小谷

初冠雪 拝み仰ぐ月の山
蒼背の月山古道紅葉晴れ
朝日子の紅葉綿繡の山法師
冠雪の鳥海山よ師の忌過ぐ
雪女来るかも眉刷毛万年青咲き

名も知らぬ虫なれ声のこよなくて
飾りけり名のある柿の色良きを
露の朝いとし子こつと果てにけり
老いの身の愛子を逝かす露けき日
秋入日逆縁背負ふ老い二人

落葉松

大森三保子

土器

鈴木まゆ

白鳥のこゑのしてゐる葭の中
白鳥の水面を打ちて立ちにけり
初鴨や遊覧船の水しぶきを
をしどりの来てゐる樹下の水面かな
穂高新雪迫る落葉松林かな

つながらぬ出土の欠片地虫鳴く
工房の鑿の切つ先秋澄めり
かはらけに燈明の煤秋深む
行く秋の風はらわたに張子虎
修復の木偶の半眼雁渡し

風雪十五句

千鶴子選

逃げ足の速き日差や柿すだれ
枯れてゆくものに瀬音も加はれり
雁皮紙にはさむ金箔しぐれくる
冬耕の一打石火を放ちけり
菊枕妣恋ふ夜は抱き寝る
利かせたるそば湯の山葵雁のころ
丹田に力込めよと獺祭忌
石露咲くや夕風に立つ湖の波
冬耕の夫を呼ぶ声遠訝
稲架を組む田は金色の火口原
黄味のずれ二百十日の目玉焼
秋風や合せ鏡に妣の顔
赤とんぼ赤きは情の濃きならむ
月の川に景のととのふ城の町
御所に住み蓑虫蓑を脱ぎもせず
裁つ布の耳たしかむる秋灯

窪田 粧子
馬屋原 純子
小林 千草
曾根 薫風
中島 久子
伊藤 ふみ
小坂 優美子
緑川 啓子
川村 清子
板坂 良子
布施 政子
常盤 しづ子
村上 絢子
堀田 順子
神谷 文子
佐藤 保子

令和元年度馬酔木新人賞

大杉映美

返答の子の直球や青蜜柑
団栗の落ちしばかりの音拾ふ
柚子風呂のひとりの贅に溺れけり
春宵の箸にこぼるる化粧塩
片陰をはみ出してゆく反抗期



伊藤幹哲

牡丹焚火闇の幽かに震へけり
負鶏の片目潰れて駆けりけり
達治忌の桜隠しの夜は更けぬ
鵜飼舟波間の月を揺りにけり
峰雲の落ち込む湖の碧さかな



馬酔木集

徳田千鶴子 選



落鮎の腹に朱さすいのちかな
ななかまど燃ゆるや風の風蓮湖
糠床へたかの爪足す獺祭忌
風吹けば色ほろぶごと草の花

浜

松

川内谷育代

青竹の杯にあふるる新走
箸置きの兎跳ねたる良夜かな
折返し返事の届く菊日和
流人墓埋めつくして草の花

京

都

川合 弘子

美濃に入る山柿を見て城を見て
恵那峡の水の暗さや秋北斗
非常口午前零時の虫の闇
窯元へ大根畑を抜けてゆく

堺

市村 明代

しろがねの雫散りばめ藤袴
十字架の返す海光鳥渡る
白萩の風に肩組む道祖神
金秋や十石舟に客ふたり

中江はるみ

志摩の海縫うて華やぐ月の道
船縁を打ち漕ぎ出す秋の峡
雲放つ飛驒の山嶺一位の実
織月を沈め当麻の敗蓮

浜

松

鈴木 幾久

萩散るや終のひかりの糸をひき
山越えの風が風よぶ蕎麦の花
縫ふ針のやや反り返り夜長の灯
秋茄子や母にのこれる欲わづか

田

辺

桐本美恵子

馬酔木集 選後反芻

徳田千鶴子

暖かいと思つた翌日、急激な寒さ。インフルエンザも流行っています。皆様、体調如何ですか。

私は動きすぎと心配いただいています。大丈夫、足腰に負担はかけていませんが、元気に過ごしております。

十月十五日に俳句大賞の選考があり、司会を務めました。大賞、準賞が決まり、プ
ラチナ賞（八十歳以上の応募者）に南光翠峰氏が決定しました。馬酔木としては二人
目の受賞です。他に四人の会員が入選していました。残念ながら、私の選には一人
もいらつしやらなくて。

選者の方々の意見に、討論する事の大切さを学びました。自分の思いの及ばない句
の魅力を知らされました。

皆さん、是非投句して。一句勝負ですのでチャンス大ですよ（但し、俳人協会々員
限定。どうぞ会員に）。

風吹けば色ほろぶごとと草の花 川内谷育代

秋に咲く草の花は、特に可憐だ。中七の〈色ほろぶごと〉に惹かれた。風にちぎれ
るほど揺れる姿は、健気にうつる。〈ほろぶ〉という言葉のもつ哀れさ。枯れる寸前
の花の刹那の瞬を詠まれた。

美濃に入る山柿を見て城を見て 市村 明代

鍛錬会は名古屋からバスで多治見に向かった。その間五十分余。その車中で清洲城
はじめ幾つものお城を教えられた。さすが織田信長の地だ。バスが高速道路をおりる

と、どこの家にも柿が実って、その赤い色が目に残った。その景を端的に詠まれた。

箸置きの兎跳ねたる良夜かな
川合 弘子

想像力の楽しさ。中秋の名月の食事に用意した箸置きは兎の形。月の兎と呼応して、跳ね出しそう。

秋茄子や母にのこれる欲わづか
桐本美恵子

人間には五欲があるという。眼・耳・鼻・舌・身の五根に対しての（色・声・香・味・触）。秋茄子のおいしさは格別。様々な諺があるが、元は「秋なすび早酒（わさき）の粕につきまぜて柵におくとも嫁に食はずな」の和歌に因るといふ。この「嫁」は嫁が君のことで鼠のこと。お嫁さんの事ではないので、お姑さんも安心して。少しでも食欲が出るように、茄子の料理を用意する。その気持をいただいた。

亡き人の声より忘れこぼれ萩
須崎 淑子

私は二十年以上前に亡くなった夫の声を覚えているが、それは死の一分前まで喋っていたからで、その最後の声と言葉が忘れられず、それはそれで辛いものだ。出来る事なら楽しかった事だけ思い出したいもの。忘れていく寂しさが「こぼれ萩」から伝わる。

月の木となりて無患子影正し
米山のり子

私の無患子の印象は、深大寺境内に一本すくと立つ姿。月光に照らされた木は神々しいばかりだろう。此の句もまた端正。